

G. アポリネールの詩「雨が降る」とカロール＝ベラルー ——作曲家カロール＝ベラルーが詩の成立に与えた影響についての考察——

Il pleut d'Apollinaire et Carol-Bérard:

Sur une inspiration possible au poème donnée par le compositeur Carol-Bérard

浅見 聖怜奈

ASAMI Serena

キーワード：ギョーム・アポリネール、カロール＝ベラルー、「雨が降る」、「俳諧」

0. はじめに

ギョーム・アポリネール Guillaume Apollinaire (本名：ヴィルヘルム・アポリナリス・ドゥ・コストロヴィツキー Wilhelm Apollinaris de Kostrowitzky) (1880-1918) の詩、「雨が降る Il pleut」は、詩集『カリグラム：平和と戦争の詩 1913-1916 Calligrammes : Poèmes de la paix et de la guerre 1913-1916』(1918) に収められており、カリグラムという手法が用いられた詩である。カリグラムとは、アポリネールによる造語で、視覚的イメージへ訴え、文字を用いてイラストを描くといった、1つの絵になるように詩行を配列した詩を指す。

このアポリネールの「雨が降る」に付曲したのものとして最も有名な作品は、フランシス・ジャン・マルセル・プーランク Francis Jean Marcel Poulenc (1899-1963) による1948年の楽曲であろう。彼の歌曲〈雨が降る Il pleut〉は、アポリネールの詩集『カリグラム』からとられた7編の詩に付曲した楽曲から構成される歌曲集《カリグラム Calligrammes》(1948) に第4曲として収められている。

この歌曲があまりに有名なため、現在、アポリネールの「雨が降る」へ付曲された歌曲といえば、プーランクによる楽曲を多くの人がすぐに思い浮かべるだろう。しかし、プーランクの〈雨が降る〉は、アポリネールの詩「雨が降る」に付曲された唯一の歌曲でも、最初の作品でもない。

アポリネールと音楽の関係を総合的に論じたアレッシンドロ・マラ Alessandro Maras の著書“Apollinaire, les musiciens et la musique” (2021) では、アポリネールの詩「雨が降る」への付曲をめぐる、「1918年にカロール＝ベラルー Carol-Bérard (1881-1942) が最初に作曲した」(Maras 2021, 180) としている¹。しかし、後述するように、アポリネールの詩「雨が降る」への付曲について、この記述は必ずしも正確ではないという疑いが生じてきた。

また、このカロール＝ベラルーの作品についての調査の過程で、そもそもアポリネールの詩「雨が降る」が、カロール＝ベラルーなる作曲家・詩人を介して、当時のジャポニズムの流行、特に俳句に触発されて成立した可能性があるとの仮説を得るに至った。これは文学領域のアポリネール研究においても因果関係としては論じられていない。本研究は、アポリネールの詩「雨が降る」の成立起源について、錯綜している情報を整理し、テキストの比較、そして友人関係にあったアポリネールとカロール＝

ベラールの書簡記録等から、この仮説に対する裏付けを試みるものである。

1. アポリネールの詩「雨が降る」の成立年

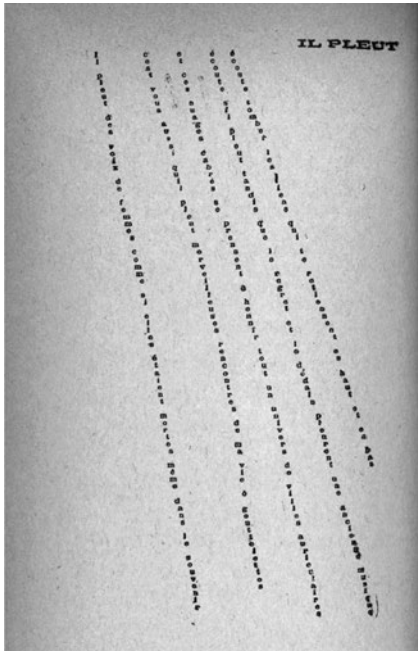
アポリネールは、象徴派とシュルレアリストを繋ぐ存在とされる詩人であり、生涯を通して前衛的な芸術運動に参加し、ダダ・シュルレアリズムなどの新しい詩や芸術の創造に大きな影響を与えた。「カリグラム」をはじめとし、例えば「キュビズム」などの独自の言葉や、句読点の廃止・自動記述法といった新しい手法を創作するなど、様々な芸術の可能性を探ろうとしていた詩人である。

そのアポリネールの詩「雨が降る」(図版1)は、アルファベットを縦書きに記し、行は左から右へ進むように配置することで雨が降っている様子を表しているカリグラム詩である。この詩の初出は、当時の前衛的な芸文雑誌『SIC (Sons, Idées, Couleurs, Formes)』の第12号(1916年12月)である²。『SIC』誌は、ピエール・アルベール＝ピロ Pierre Albert-Birot (1876-1967)によって1916年1月に創刊され、1919年12月まで全54号が刊行された。20世紀初頭のヨーロッパでは、各地で旧弊を打ち破ろうと前衛的な芸術運動が盛んに起こり、様々な前衛芸術のグループが自身の立場を表明するための手段の一つとして芸術雑誌を創刊しており、いわばその先陣を切ったのがアルベール＝ピロの雑誌『SIC』であった。

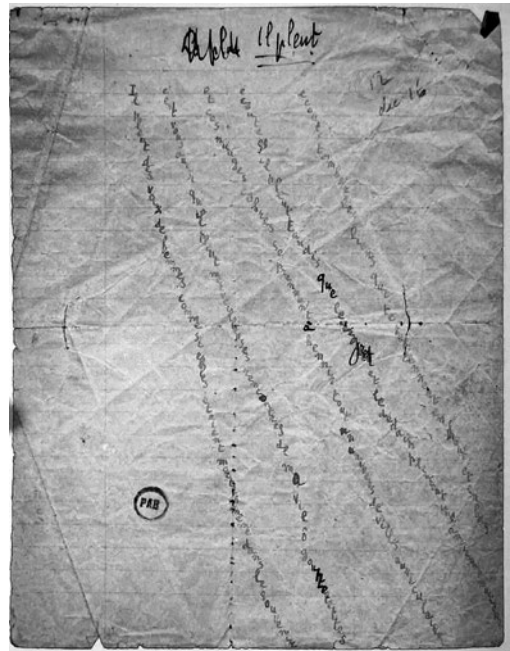
アポリネールのカリグラム詩「雨が降る」は、詩集『カリグラム：平和と戦争の詩 1913-1916』に収められていることは先に述べた通りである。この詩集は、2008年にアポリネール研究家のクロード・ドゥボン Claude Debon により、原稿のファクシミリなども収めた詳細な批判校訂版³が出版されている。ここでは、アルベール＝ピロが所蔵していたアポリネールの「雨が降る」の原稿も見ることができる(図版2)。これによると、文字が赤インクで書かれていること、いくつかの文字が上から黒インクで書き足されていること、タイトルが「雨 La pluie」から「雨が降る Il pleut」に訂正されていることがわかる。また、タイトルの右下に書かれている「12 dec. 16」の文字は、『SIC』誌第12号(1916年12月)への掲載予定をメモしたものであるとされている(Debon 2008, 112)が、「12 dec.」が掲載予定雑誌である『SIC』誌の「12号」を意味するものであるのか、それとも「12月12日」を示すものであるのか、性急には断定できない。

いずれにせよ、ドゥボンの研究によるアポリネールの「雨が降る」の原資料は、1916年より前に遡ることができないことを明らかにしている。一方インターネット上には、アポリネールの詩「雨が降る」は、アポリネールが1914年に出版を計画していた『抒情的・彩色カリグラム集 Album d'idéogrammes lyriques et colorés』の中に入っており、成立は1914年より以前であるとの情報がみられる。たとえば、ニューヨーク近代美術館 MOMA の web ページでの記述が代表的なもので⁴、英語圏での MOMA の権威により、これが事実のように述べられることもある。しかし、これは事実ではない。この出版されなかった『抒情的・彩色カリグラム集』は、『そして私も画家 Et moi aussi je suis peintre』の別名を持ち、そのゲラ刷りのファクシミリ版は後者のタイトルで2006年に既に出版されているが⁵、カリグラムの他の作品と違って、「雨が降る」はその中に含まれていない。このウェブページの匿名の執筆者は明らかに、原資料を確認しないまま成立年について、カリグラムの他の詩についての情報と混同した記述を行っている。

図版1 『SIC』誌1619. 12. 第12号に掲載された「Il pleut」



図版2 「Il pleut」の自筆原稿



Debon, Claude. 2008. Calligrammes dans tous ses états, édition critique du recueil de Guillaume Apollinaire. Ed. Calliopées, p. 112.

2. カロル＝ベラルールの《俳諧 Haï-Kaï》

アポリネールの詩「雨が降る」への付曲について、マラは「プーランクのものを含めて10回ほど作曲されており、最初のものはカロル＝ベラルールによる1918年の曲である」(Maras 2021, 180) と述べている。以下に、この記述についての検討を行いたい。まずは、作曲家カロル＝ベラルールについて、次にそのカロル＝ベラルールによる〈雨が降る〉なる作品について述べる。

2. 1. カロル＝ベラルールについて

そもそも、作曲家カロル＝ベラルールとは何者であろうか。

作曲家カロル＝ベラルール Carol-Bérard (本名：ルイ・シャルル・ベラルール Louis Charles Bérard) (1881-1942) については、フランス国立図書館 Bibliothèque nationale de France (以下 BnF と称す) の作品カタログのページ⁶⁾に、「1881年マルセイユ生まれ、1942年パリにて没」のデータとともに、24の音楽作品が挙げられている。しかし、伝記的研究や文献は存在せず、また New Grove Online のような規模の事典にも項目は存在しない。ルネ・デュメニル René Dumesnil による、唯一のある程度のもまとまった記述全文を以下に訳出した。

イサク・アルベニス Isaac Albéniz (1860-1909) の弟子であり、戦前 [第一次大戦以前]、若いながらも、「録音されたノイズによる未来の音楽」や、「映画と音楽のシンクロニズム」に関する

研究論文で先駆的な役割を果たした。詩人、小説家でもあり、1908年からオリヴィエ・レアルトール Olivier Realtor のペンネームで、フランスに日本の「俳諧」を紹介していた。17歳のとき、ジョゼファン・ペラダン Joséphin Péladan (1858-1918) の『セミラミス Sémiramis』の付随音楽を作曲し、1910年には《機械の力の交響曲 Symphonie des Forces Mécaniques》、《船 Navire》(消失)、《夜の駅 Gare nocturne》、《街の上の飛行機 L'Aéroplane sur la Ville》を作曲し、こうした主題や、通常のオーケストラの手段に騒音を加えることで、現代生活の魅力を前面に出した。歌曲には、アポリネール、ポール・フォール Paul Fort (1872-1960) の詩によるもの、カミーユ・モークレール Camille Mauclair (1872-1945) による《5つの詩 Cinq Poèmes》、あるいは《海底の散文詩 Proses Sous-Marines》、《カケモノ Kakémonos》、《ハイカイ Hai-kai》がある。また、多数のピアノ曲(《雨の中のダンス Danse sous la pluie》、《プレリュードとダンス Prélude et Danse》、《ペルシアの王の墓 Le Tombeau du Roi de Perse》)に加え、いくつかの組曲(《エジプト Egypte》、《極東 Extrême-Asie》、《プロヴァンス Provence》)がある。あらゆるジャンルで機知に溢れた積極的な探求心、運動と現代生活に熱中する明晰な知性、そして真の芸術家としての感性を彼は示した。(Dumesnil 1930, 215-216)。

カロール＝ベラルールに対するデュメニルのこうした好意的な評価にもかかわらず、上述したようにまとまった伝記的研究や作品研究は存在しない。日本語の資料としては、唯一1956年に出版された平凡社の音楽辞典にカロール＝ベラルールについての項目があるが、デュメニルの記述をほとんど元にしたものであると思われる。しかし、1983年に出版された平凡社の新しい音楽大事典にはその項目はなく、時代の流れとともに忘れ去られてしまった作曲家の一人といえよう。彼の名をキーワードに文献検索を行うと、同時代の記事や20世紀音楽史の研究である程度頻繁に出現することはわかる。しかし残念ながら、断片的な情報が散在するだけである。これらのデータから、彼の足跡を辿る伝記的研究は将来に任されているとあってよいであろう。翻って、本研究での調査がそうした試みの一助となれば幸いである。

2.2. 歌曲集《俳諧 Hai-Kai》について

BnF のカロール＝ベラルールの作品一覧が掲載されているページ⁷には「雨が降る」というタイトルの作品は存在しない。一方、「音楽と俳句 Musique et haiku」と題された、俳句や和歌をモチーフにした作品や、それらの短い詩に曲をつける作曲家について紹介しているドミニク・シポ Dominique Chipot のウェブ上の小論 (Chipot, n.d.) に、カロール＝ベラルールによる作品も取り上げられており、その中の一つに「Il pleut…」という詩句で始まる作品が存在した。この作品に関する説明として記述されている「カロール＝ベラルールは、1912年に9つの歌曲と4つの間奏曲で区切られた《俳諧》という曲集を作曲した⁸」との情報を手掛かりとして調査を進めたところ、次のことが判明した。

この《俳諧》という作品は、先の BnF のカロール＝ベラルールの作品一覧のページで確認することができ、詩もカロール＝ベラルール、作曲年は1912年とされている。初版は1926年にパリのマックス・エシク社 Max Eschig より出版された⁹。この初版のデジタルスキャン画像をBnFの複製サービスにより

入手した。また、初版の復刻版が現在も同社から販売されており、先の初版画像と比べてみたところ、両者はまったく一致している。

カロール＝ベラルールの歌曲集《俳諧》は、ピアノ伴奏による作品で、9つの歌曲と、前奏・2つの間奏・後奏にあたる4つの舞曲（ピアノソロ曲）から構成されている（表1）。この中の歌曲第3曲である〈午後の終わり Fin d'après-midi〉が、「雨が降る Il pleut」の歌い出しを持つ作品である。歌詞はそのあと“午後の終わり Fin d'après-midi”と続き、アポリネールの詩「雨が降る」とはその詞が違う。また、現在までの調査で、カロール＝ベラルールの作品に〈雨が降る〉というタイトルを持つ別の歌曲（アポリネールの詩によるもの）は、発見できていない。

表1 カロール＝ベラルールの《俳諧》全曲一覧

Prélude à danser (piano)	踊りの前奏曲
1. Le Navire	船
2. L'arbre nain	小さな木
3. Fin d'après-midi	午後の終わり
Geïcha, interlude à danser (piano)	芸者 踊りの間奏曲
4. Les lanternes s'éteignent	消える提灯
5. Toute une vie	生涯
6. Indécision	優柔不断
Samurai, interlude à danser (piano)	侍 踊りの間奏曲
7. Désir	欲望
8. Les rizières fleurissent	稲田は花咲く
9. Le bonze sous le portique	柱廊の下の僧侶
L'Enterrement du Haijin, à danser (piano)	俳人の埋葬

以下に、楽譜の初版デジタルスキャン画像から、〈踊りの前奏曲〉と〈午後の終わり〉の冒頭を譜例として引用する。

譜例1 《俳諧》冒頭〈踊りの前奏曲〉

HAÏ-KAÏ

Poèmes et Musique de
CAROL-BERARD
1912

Prélude dansé

Pas trop vite

PIANO

譜例 2 「Il pleut …」の詩句で始まる〈午後の終わり〉

Fin d'après-midi

CHANT

Allegretto

Il pleut.

PIANO

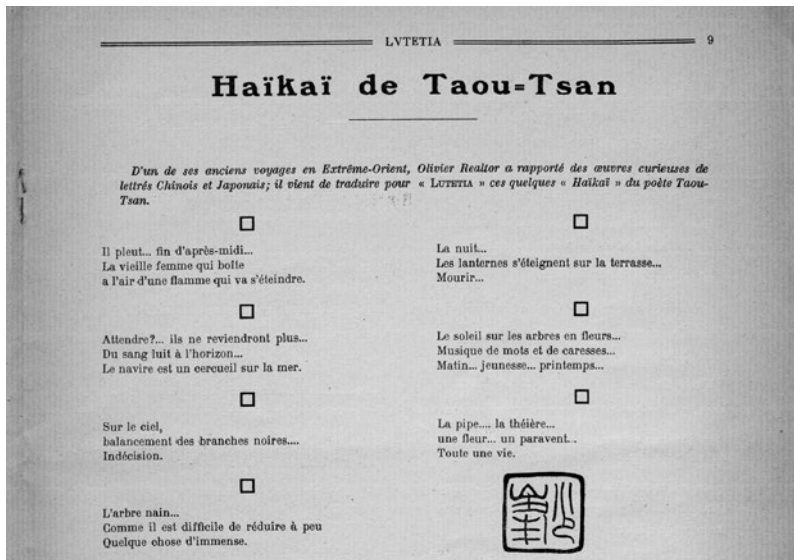
Fin d'a - près mi - di.

* ———]

ここで楽譜冒頭の(譜例1)の情報「1912年 カロル=ベラルールによる詩と音楽 Poèmes et Musique de CAROL-BERARD 1912」について整理したい。ここでまず、問題となるのは作曲年である。BnFやChipotは「1912年」としており、この年代はここからとられたものと推測される。この作曲年のデータは単純にこの楽曲単独の成立年の数字上の問題にとどまらず、はじめに提示した仮説である、アポリネールの詩「雨が降る」に俳句のリズムが流れている可能性について、大きく関係する。また、楽譜冒頭には詩も彼自身によるものであると記されている。次項ではカロル=ベラルールの《俳諧》の成立年について、詩の成立背景から調査を行った。

2.3. 連作詩『俳諧』について

この歌曲集第7・8・9曲以外の詩は、詩「Taou=Tsánの俳諧」として、BnFのデータベースサイト Gallica に復刻で収められている1917年11月発行の雑誌『リュテシア Lutetia』(第1年巻第2号)に初出されている。そして、ここではカロル=ベラルールではなく別人の名で発表されている(図版3)。



ここには、「オリヴィエ・レアルトール Olivier Realtor が、極東旅行で集めてきた日本と中国の文学テキストの中から、Taou = Tsan の Hai-Kai を翻訳したもの」という説明で全7編のフランス語の俳句が載っており、そのうちの最初に掲載されている詩が歌曲〈午後の終わり〉の歌詞である“*Il pleut*”の詩句から始まる詩に他ならない。右側上から2番目の詩“*Le soleil sur les arbres en fleurs...*”を除く他の5編は、いずれも歌曲集《俳諧》に付曲され、順番を変えて収められている。

オリヴィエ・レアルトールはカロール＝ベラルールの筆名である (Dumesnil 1930, 215)。この詩がカロール＝ベラルール自身の作であることは、前項の楽譜初版にかんする段ですでに上述した。とすると、カロール＝ベラルールはこの「Taou = Tsan なる東洋人の俳句を自分で翻訳したもの」を自作としたか、あるいは Taou = Tsan という架空の人物をペンネームとして、自らのフランス語の俳句を、ここに架空の旅行の説明とともに掲載したか、との推察ができる。詩人 Taou = Tsan についての調査を行ったが、欧文表記、またこれから想定できる漢字表記での調査によっても該当する人物は見つからない。従って、後者の可能性が高いと考える。また、ここで使われている漢字の印は、何らかの情報を与えるだろうか。印の篆書は、少峯（シャオファン）であると判読できるが、これから想定される欧文表記での調査でも、この詩や Taou = Tsan と関連する人物についての情報は得られない。

1919年6月8日づけの『Le Carnet de la semaine』誌 (RetroNews¹⁰所蔵) に掲載された、「*De l'homme au monocle vert à la Gavotte-Trianon*」と題する、オリヴィエ・レアルトールとカロール＝ベラルールについての小さな紹介記事には、「レアルトールとカロール＝ベラルールは精神的な兄弟である¹¹」と記されている。匿名の記事の書き手がどのようにこの情報を得たのか、当事者の言葉を真に受けたのか、それとも、遊びに加担しているのかは不明だが、こうした情報が本人から発したものであるにせよ、彼の仲間うちでの噂を記事にしたものにせよ、カロール＝ベラルールやそのサークルが、謎めいた逸話で遊ぶ趣味を持っていたことが窺える。またすでに述べたとおり、レアルトールはカロール＝ベラ

ルの筆名であることから、東洋旅行や Taou=Tsan の俳句の翻訳など、これら全てがカロール=ベラルールの創作によるものではないかとの推測が強まる。この架空の創作については、前例として、クロード・ドビュッシー Claude Debussy (1862-1918) の歌曲として有名な、ピエール・ルイス Pierre Louÿs (1870-1925) の『ビリティスの歌 Les Chansons de Bilitis』(1894) が挙げられる。この詩は1894年発表の散文詩である。「古代ギリシャのサッポーと同時代の女流詩人による詩をギリシア語から翻訳した」として発表されたが、これは架空の人物であった。カロール=ベラルールの《俳諧》は、こうした「ある種の冗談」といった伝統に連なるものとして考えられる。

2. 4. 《俳諧》の演奏記録について

前項で述べたとおり、カロール=ベラルールの連作詩『俳諧』の初出は1917年であることが明らかとなった。ここでは歌曲の成立年代について、演奏の記録からも検討してみたい。RetroNews での調査により、カロール=ベラルールの《俳諧》の公演について、次の2つの情報を得ることができた。

1918年8月3日の『Le Figaro』紙には、「Art et Liberté」というグループが、明日の日曜日の昼間4時に興味深いものを上演し、「すべて日本の芸術を扱うだろう」と記されている。また、魅力的な「俳諧 Hai-Kai」(エピグラムや詩など)を耳にし、痛快な「カンパイの死 La Mort de Kampai」そして斬新な空想喜劇「三人の不具者 Trois Estropiés」の初演に立ち会おうだろう、ララ夫人 Mmes Lara、プロシュ=シャルパンティエ夫人 Proche-Charpentier、リモージュ嬢 Mlle Limoges、カロール=ベラルール、日本人のダンサーヨコイが出演と記載されている(図版4)。

1918年8月12日の『La France』紙では、「Le Théâtre un spectacle japonais」のタイトルで先の記事の催しもの全体の報告がなされている。記事末尾には、カロール=ベラルールは、「魅力的な Taou =Tsan の Hai-Kai を作曲した」と記載されている(図版5)。

図版4 Le Figaro 1918年8月3日

Le groupe d'« Art et Liberté » donnera une intéressante matinée demain dimanche, à 4 heures, 64, rue Cortambert, chez notre confrère Fernand Divoire. Elle sera entièrement consacrée à l'art japonais. On y entendra les plus délicieuses hai-kai (épigrammes, vers, etc.), et on assistera aux premières représentations de *La Mort de Kampai*, drame très poignant, et des *Trois Estropiés*, comédie d'une audacieuse fantaisie. Prêteront leur concours, Mmes Lara, Proche-Charpentier, Mlle Limoges, M. Carol-Bérard, et la danseuse japonaise Yokohi.

図版5 La France 1918年8月12日

Le Théâtre
Un spectacle japonais

L'autre dimanche, dans un petit hôtel de Passy, comme pour célébrer une intervention longtemps souhaitée, a été donné un spectacle japonais organisé par Art et Liberté et présenté éloquentement par Carlos Larroude.

C'était dans une jolie salle dont les portes-fenêtres ouvrent sur un jardin. En guise de décor, quelques robes brodées, quelques riches étoffes jetées sur des paravents et trois fleurs d'étole s'élevaient à fleur d'eau dans un vase posé sur le parquet.

On récitait d'abord le rituel de la grande purification, de Okonashi no Kotoha (divinisme sibyllique, puis un extrait du Kojiki ou Livre des Choses anciennes, qui remonte au siècle huitième : Le Livre blanc d'Inaba. Et se succédaient : La misère de Okonno (sibille de Nara) l'Éloge du Saké, de Tabbitto, et les Lamentations d'un guerrier envoyé à la frontière de Yakamotchi, enfin les Notes de l'oreiller de Sei Shônagon, les Cinq vertus du bain public de Sambo, des Hai-Kai (notations brèves) et des Epigrammes de Matsunos Bashô (1644-1694). Mme Lara a très joliment détaillé de courts et arctiques poèmes qu'on a pu justement comparer aux rapides descriptions de Jules Renard.

Les origines du drame populaire japonais remontent à la seconde moitié du seizième siècle. Il évoque souvent des rivalités féodales et ont pour motif l'honneur, l'honneur implacable tel qu'on le retrouve dans les drames espagnols.

Notus avons entendu un fragment de Zeboushinsgoura, drame de Tadeka Troumo.

Ce fragment met en scène la mort de Hanyano Kampéi. Pour son seigneur, le ruisseau

fidèle doit, s'il le faut, voler et tendre sa femur ou sa fille. (C'est ainsi que pour son Roy, Sanchez Orta, le héros de l'Étoile de Séville tuera son meilleur ami, le frère de sa fiancée, Busto Tabera). Après avoir obéi, Kampéi fait harakiri.

M. Carlos Larroude a joué très sobrement ce rôle, avec des attitudes précises, des gestes mécaniques.

Mme Lara a tenu avec une noblesse douloureuse le personnage de la mère.

Mme Limoges les filles se montra tout chante et résignée.

M. Marcel Herrand, Dubout et Paul Cabanel ont bien tenu les autres rôles, de Ichi-mongita, Hara-Goemon et Senzaki Zogoro.

Entre deux ou trois drames lyriques que nous a fait connaître M. Noël Ferry, on joue toujours des « kyôghens ». Ce sont des farces qui correspondent aux entremets d'Espagne.

Art et Liberté nous a présenté une de ces farces : les Trois Estropiés de Souin-Gatsueu.

Un riche bourgeois qui ses valets ont mis à l'épreuve prend à son service un eul-be-jalle, un aveugle et un muet auxquels il confie la garde de sa demeure. Mais ce sont trois faux infirmes, trois joueurs, trois débâchés. Quand le chat n'est pas là, les trois dansent. A son retour, le maître trouve ses mauvais serviteurs ivres de son saké - le muet chante, le cul-de-jalle gambade et c'est l'aveugle qui, le premier, aperçoit le patron.

Pour cette séance, on avait eu recours aux excellentes traductions de Paul-Louis Couciard et surtout de Michel Revon, l'auteur d'une merveilleuse Anthologie de la Littérature japonaise.

M. Carol Bérard a mis en musique de charmants Hai-Kai de Taou-Tsan qui furent interprétés subtilement par Mme Proche-Charpentier accompagnée par l'auteur qui initiait cela « Musique pour saïks de très petite dimension ». Et c'est fin, « spirituel, délicieux ».

GUILLOT DE SAIT.

これらの情報から、カロール＝ベラルの 歌曲集《俳諧》が演奏されたことは明らかである。しかし、1918年8月4日に演奏されたものは、初演であるとの記述はないため、1918年の成立であるかどうか現時点の情報では断定できない。

3. カロール＝ベラルとアポリネール

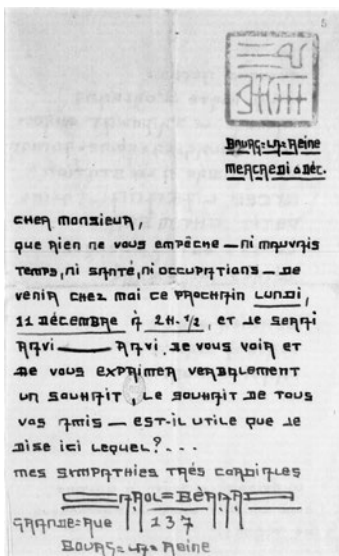
《俳諧》の成立時期に関して、前項では演奏の記録から検討したが、本節では別の視点からの考察を試みたい。

3. 1. 書簡①の考察

まずは、両者の交流関係、ここではカロール＝ベラルがアポリネールへ宛てた書簡記録から考察する。はじめに述べたとおり、二人は友人関係にあった。BnF には、アポリネール宛ての書簡を整理した全19巻の資料が所蔵され、電子版で公開されている。発信者のアルファベット順に整理されたこれらの巻の第2巻“Guillaume Apollinaire. Correspondance. I Lettres reçues. vol. 2”¹²には、9ページにわたり、カロール＝ベラルからの手紙が断簡を含め6通収められている。日付を持つものは5月1日（おそらく1916年）のものが最初で、明確な日付はないが遅いものは1918年9月以降、アポリネールの死去した11月9日の前までのものだと推測される。このうち、次に引用する3つめの書簡が極めて興味深い情報を与えてくれるものである。

この、1916年12月6日付けの書簡（日付は12月6日（水）のみ記されているが、封筒の消印と、曜日から1916年のものであると同定できる）を、以下にテキストの転写とともに示す（図版6）。カロール＝ベラルの文字は大文字と小文字の区別がされていない独特なものであるが、ここではフランス語の一般的な書式に則って記す。

図版6 カロール＝ベラルからアポリネールに宛てた書簡 1916年12月6日



Bourg-la-Reine
Mercredi 6 déc

Cher Monsieur,
Que rien ne vous empêche - ni mauvais
temps, ni santé, ni occupations — de
venir chez moi ce prochain lundi,
11 décembre à 2h-1/2, et je serai
ravi — ravi de vous voir et
de vous exprimer verbalement
un souhait, le souhait de tous
vos amis — est-il utile que je
dise ici lequel ? ...
mes sympathies très cordiales

Carol Bérard
Grand-rue 137
Bourg-la-Reine

この手紙の内容は、カロール＝ベラルーがアポリネールに、12月11日14：30に自分の自宅で会う約束を確認したもので、この約束が果たされたとすると、二人はこの日に面会している。手紙が送られた1916年12月は、アポリネールの「雨が降る」の成立において、重要な意味を持つ時期である。

前述のとおり、アポリネールの「雨が降る」の原稿には、『SIC』誌の第12号への掲載予定をメモしたものと、「12月12日」とも取れる書き込みがされている。また、初稿が、雑誌の編集過程のどこで編集者の元に達しているのかを判断する材料も今の所ない。そして、この手紙が送られた1年後である1917年には、カロール＝ベラルーが『俳諧』を『リュテシア』誌で発表している。このことから、カロール＝ベラルーとアポリネール両者の間で、「雨が降る」の話があったと推測することは自然であろう。会話の内容については推測の域を出ないが、例えば、カロール＝ベラルーが、後に楽譜の日付で「1912年の作品である」と主張する「午後の終わり」の原稿を持っており、そのことをアポリネールに話したか、あるいは少なくともその時すでに『俳諧』や「午後の終わり」なる俳句の翻訳詩なるアイデアが存在し、それに関する会話が、アポリネールの「雨が降る」(俳句と酷似する縦書きのカリグラム)ヘインスピレーションを与えた可能性は考えられる。

さらに、カロール＝ベラルーがアポリネールに与えた影響、俳句への関与の可能性について、次の点を指摘したい。それは、カロール＝ベラルーの書簡に、『リュテシア』誌で Taou=Tsan のものとされた「少峯」の印が使われていることである。デュメニルの記述する、「1908年からオリヴィエ・レアルトールのペンネームで、フランスに日本の「俳諧」を紹介していた」との事実は確認できていないが、少なくとも、1917年の『リュテシア』誌に「俳諧」の翻訳なるものを発表する前、そしてアポリネールに会った1916年12月頃にはすでに、東洋の事物に興味を持っていたのは確かである。

3. 2. テクストの比較

前述した、アポリネールの詩「雨が降る」とカロール＝ベラルーの歌曲集《俳諧》または連作詩『俳諧』の影響関係について、ここではテキストの比較から考察する。アポリネールの詩「雨が降る」のカロール＝ベラルーの歌曲〈午後の終わり〉の詩はアポリネールの「雨が降る」と同じ“il pleut”と言う語句で始まるものの、アポリネールの詩「雨が降る」とは別のものであることはすでに述べたとおりである。以下は、2つの詩の原文と翻訳である。翻訳は筆者による。

Il pleut	G. Apollinaire	雨が降る	G.アポリネール
Il pleut des voix de femmes comme si elles étaient mortes même dans le souvenir C'est vous aussi qu'il pleut merveilleuses rencontres de ma vie ô gouttelettes Et ces nuages cabrés se prennent à hennir tout un univers de villes auriculaires Écoute s'il pleut tandis que		女たちの声が降る その声はまるで死んでいたかのようだ 記憶の中でさえも お前たちも降っている 僕の人生の素晴らしい数々の出逢い おお小さな水滴たちよ そして立ち昇るあの雲たちは いなき始める 耳の町の全宇宙に 聴いてごらん もし雨が降るなら	

le regret et le dédain pleurent une ancienne musique Écoute tomber les liens qui te retiennent en haut et en bas	後悔や軽蔑が 古い歌を嘆き歌うとき 聞いてごらん お前を高く低く とどめていた絆が切れるのを
Fin d'après-midi Il pleut. Fin d'après-midi La vieille femme qui boîte à l'air d'une flamme qui va s'éteindre.	午後の終わり 雨が降る。 午後遅く 足を引きずった老婆は 今にも消えそうな炎に見える。

この2つの詩を比較すると、「雨が降る Il pleut」という句で始まること、「女性たち」（アポリネールの「女性（たち） de femmes」、カロール＝ベラルールの「老婆 La vieille femme」）、「死」に近いという概念（アポリネールの「まるで死んでしまったかのように comme si elles étaient mortes」、カロール＝ベラルールの「今にも消えそうな炎に見える à l'air d'une flamme qui va s'éteindre」）が共通している。アポリネールの詩はこの後も詩句が続くものの、両者の詩の内容は極めて似ている。このことも、2つの詩の成立について、両者の影響関係を推測させる。

アポリネールの「雨が降る」は、先に述べたとおり1916年の成立である。カロール＝ベラルールの詩「午後の終わり」を含む連作詩『俳諧』または歌曲集《俳諧》が、楽譜の記載の通り1912年の成立であるとする、アポリネールの「雨が降る」に先行することになる。つまりアポリネールの「雨が降る」は、カロール＝ベラルールの詩作品もしくは音楽作品、しかも俳句の翻訳として紹介されたものの影響を受けて書かれた可能性があるといえる。

アポリネール研究において、アポリネールのカリグラムは、『SIC』誌の編集者であるアルベール＝ピロがカリグラム詩を書き始めることに影響を与えたことや（Simon-Oikawa 2008, 151）、日本でカリグラム俳句が書かれることに影響を与えたという指摘はすでにされており、俳句と雰囲気の違いを感じさせはするが、アポリネールの「雨が降る」のほうが、俳句から何らかの影響を受けて書かれたとの指摘は、アポリネールに関する文学研究においても、現時点で筆者の確認した範囲では論じられていない。

3. 3. 俳句との類似性について

カロール＝ベラルールとアポリネールの影響関係についてもうひとつ指摘したい。それは、アポリネールの「雨が降る」そのものと、俳句の基本構造との類似性についてである。アルファベットが上から下へ、縦に配置されているのは、もちろん雨の降る方向を表したものであろうが、日本語のテキストが縦に書かれることと無関係であろうか。上から下に縦に書くカリグラムの技法は、アポリネールのこれ以前のカリグラム作品には見られない。また、下記に示す批判校訂版での転写が明確にするように、この詩は一連が3行をひと組とする構成になっている。これは俳句の5-7-5による3連1組を彷彿とさせ、まとまりを持たせようと意識されているとも取ることができる。転写右側の数字は音節数を示す。

また、最後が2行である韻律構成は、ソネットとの一定の類似が見られるものの、3行を基調とするこの形式は、フランスにおいては珍しく、詩集『カリグラム』中、またアポリネールの詩全体においてもほぼみられない。この最後に2行を付け足すのは、和歌の形式5-7-5-7-7の、7-7でしめる形式と関係している可能性も考える。

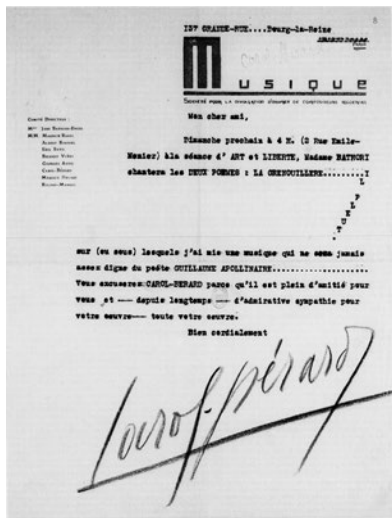
3. 4. 書簡②の考察

カロール＝ベラルがアポリネールに与えた影響について、さらに示唆的な書簡記録がある。これは、先に出てきた書簡集に含まれる、1918年のおそらく9月のものである。書簡の正確な日付は明らかではないが、「来週の日曜日」の Art et Liberté の演奏会についてカロール＝ベラルがアポリネールに報告したものである。手紙の全文の複写と日本語訳は以下のとおりである（図版7）。

カリグラム批判校訂版での Il pleut原稿の転写

Il pleut des voix de femmes	6
comme si elles étaient mortes	8
même dans le souvenir	7
C'est vous aussi qu'il pleut	6
merveilleuses rencontres	6
de ma vie ô gouttelettes	7
Et ces nuages cabrés se prennent	9
à hennir tout un univers	8
de villes auriculaires	7
Écoute s'il pleut tandis que	7
le regret et le dédain pleurent	8
une ancienne musique	6
Écoute tomber les liens qui	8
te retiennent en haut et en bas	9

図版7 カロール＝ベラルからアポリネールに宛てた書簡 1918年9月



親愛なる友へ
 来週の日曜日の4時に(2 Rue Emile-Monierにて)、「ART et LIBERTE」の会合があり、そこでパトリ夫人が「LA GRENOUILLERE」と「IL PLEUT」[*右上から左下に斜めの縦書きにてタイプ]の2つの詩を歌います。それらの詩にもとづいて[sur] (あるいはその下に[sou]) [*この表現については以下の考察を参考]、私が曲を書いたものですが、詩人ギョーム・アポリネールに十分に値するものにはならないでしょう……………
 カロール＝ベラルをお許しください。あなたへの友情に溢れ、そして、ずっと長いこと、あなたのすべての作品に賞賛とともに共鳴しているのですから。
 敬具
 (署名 Carol-Bérard)

この中でカロール＝ベラルは、アポリネールの詩に付曲した2作品が演奏会で歌われることを、後者への謙遜と敬意とともに報告している。しかし、アポリネールの詩に付曲したとする2作品についてはその存在が明らかとなっていない。

マラは、この手紙を1918年10月のものとし、その根拠として『L' Europe Nouvelle』誌の10月12日号に、演奏会が10月4日に開催されたと記されているとしているが (Maras 2021, 146)、この情報は

正確ではない。そもそも1918年10月4日は金曜日である。また、同誌10月12日号 (p. 1925) には、はっきりと日曜日の Art et Liberté の会合を9月29日と記している (“Le 29 septembre Art et Liberté réunissait ...”)。この記事でカロール=ベラルーの名は見え、バトリ夫人がその「美しい音楽を歌った」とあるが曲目についての言及はない。マラは触れていないが、この会合について、『L'Intransigeant』誌9月26日号 (p. 2) で予告がされている。そこでは会合は来たる日曜日と告げられおり、その日付から演奏会は、その次の日曜日9月29日であり、書簡も9月のものとするのが妥当であろう。この紹介でも曲目についての言及はない。

はたして、アポリネールの詩「ラ・グルヌイエール」と「雨が降る」によるカロール=ベラルーの歌曲が歌われたかどうか、さらなる調査が必要であるが、曲についての言及はこのカロール=ベラルーの9月の書簡のみで、それを元にマラは断定しているものの、筆者は別の仮説を持っている。それは、ここで歌われるという〈雨が降る〉は前月に演奏された〈午後の終わり〉ではなかったかというものである。

その仮説を進める中で、書簡の中のある奇妙な表現が注意を引く。それは、「それらに曲をつけた sur (ou sous) lesquels j'ai mis une musique」という句である。「mettre une musique sur ...」～(あるテキスト)に曲をつける」というのは、フランス語の常套的な言い回しである。“sur” (上に) というのは、「それにもとづいて、それを元にしてその上に」を意味する。しかし、手紙の文にあるこのあとの“(ou sous)”は何であろうか。“mettre une musique sous ...”は通常のフランス語の表現ではない。わざわざここに、() 中に“sous”を加えているのはどういうことであろうか。

それは、これまでの調査の中で浮上した、アポリネールの詩「雨が降る」より、カロール=ベラルーの “Il pleut” の句で始まる詩「午後の終わり」が先行するかもしれないという可能性と大きく関係しているのではないだろうか。“sous”は、直訳すれば「下に」だが、“sur”の「それにもとづいて、それを元にしてその上に」の意味に対立するものとして、「その元になるものとして」という意味に読むことができる。したがって、この部分でカロール=ベラルーは、アポリネールの詩「雨が降る」は、自分の曲、あるいはその詩「午後の終わり」をもとに作られたということを確認し、アピールするために、わざわざこうした表現を用いたのではないだろうか。謙遜の中に、カロール=ベラルーの自負がここに込められていると筆者は推測する。

既に述べたように、アポリネールの詩「雨が降る」が1916年12月に発表されたのに対し、カロール=ベラルーの「午後の終わり」は、詩が1917年11月に雑誌掲載され、楽曲が1918年8月の演奏会で演奏された。一方、1926年に出版された歌曲集《俳諧》では、作詞・作曲年を1912年と明示する。「1912年」が後付けで、大幅に年代を遡らせて付け加えられたものかどうかは別としても、彼は、この手紙において、自分の作品がアポリネールの詩「雨が降る」に先行することへの示唆を書き残しているように読むことができる。仮に、アポリネールの詩「雨が降る」に作曲したのであったとしても、カロール=ベラルーは、アポリネールへの敬愛にもかかわらず、自分の曲として出版することはなかった。

アポリネールの詩「雨が降る」とカロール=ベラルーの連作詩『俳諧』または歌曲集《俳諧》との関係について、明らかになったことをもう一度時系列に整理しなおしたものを以下に表で示す(表2)。左列にはカロール=ベラルーに関する事項を、右列にはアポリネールに関する事項を、両者に関わる事項

に関しては線引きなしで記す。重要だが、裏付けがとれていないデータについては（*）の中で注記した。

表2 アポリネールの「雨が降る」とカロール＝ベラルールの「午後の終わり」についての時系列年表

	カロール＝ベラルールに関する事項	アポリネールに関する事項
(*1908)	(*デュメニルによれば、カロール＝ベラルールはオリヴィエ・リアルトールのペンネームで、フランスに日本の「俳諧」を紹介し始める)	
(*1912)	(*カロール＝ベラルールの《俳諧》作詞・作曲として楽譜に記された年代)	
1916.12.6	カロール＝ベラルールからアポリネールへ面会約束の確認をする書簡の日付	
1916.12.11	アポリネールとカロール＝ベラルールが会った可能性のある日	
1916.12		アポリネール「雨が降る」が『SIC』誌へ掲載される
1917.11	『リュテシア』誌にカロール＝ベラルールが、オリヴィエ・リアルトール名義で、「Taou-Tsan 原作の翻訳」の連作詩『俳諧』を発表する。	
1918.8.4	「Art et Liberté」演奏会でカロール＝ベラルールの《俳諧》が演奏される。(8.3に新聞『Le Figaro』にて予告。8.12に新聞『La France』にて演奏会の批評)。	
1918.9	カロール＝ベラルールからアポリネールへの書簡。「Art et Liberté」の演奏会にて、「La grenouillère」および「Il pleut」による曲が演奏されることの報告。	
1918.9.29		「Art et Liberté」の会合演奏会(アポリネールの詩にカロール＝ベラルールが作曲したものがジャヌ・バトリにより歌われる。)
1926	《俳諧》が Max Eschig社から出版	

4. まとめと今後の展望

プーランクの歌曲集《カリグラム》に第4曲として収められている歌曲〈雨が降る〉の詩は、アルファベットの文字を縦に、行は左から右へと配置された、雨が降る様子を視覚的イメージに訴え表現されたアポリネールのカリグラム詩「雨が降る」であり、1916年12月に雑誌初出された。テキストの比較考察から、このアポリネールの「雨が降る」と文学的テーマが類似し、関係が深いと考えられるカロール＝ベラルールの『俳諧』に収められている一編「午後の終わり」は、1926年の楽譜出版時に最終的にはカロール＝ベラルール本人によって1912年の成立と記された。この楽譜の記載を除けばそれを裏づけるものはない。しかし他方、すでに示した書簡記録の検討をとおして、カロール＝ベラルールの歌曲集《俳諧》、または連作詩『俳諧』の成立が、アポリネールの詩「雨が降る」に先行する可能性が浮かび上がってきた。もしそうであるとすれば、アポリネールの詩「雨が降る」は、間接的ながら結果的に、当時のフランスで流行したジャポニズム、特に俳句にインスピレーションを得て作られたといえはしないだろうか。

これを認識するとき、アポリネールの「雨が降る」に、俳句のリズムが流れている可能性が、朗読するときの意識に上ってくる。また、プーランクによる〈雨が降る〉にも、そのリズムは音楽的に引

き継がれていることに気づかされる。プーランクの歌曲〈雨が降る〉が、ジャポニズムや俳句の影響を受けたとは到底考えられないが、ジャポニズムや俳句のリズムがアポリネールの詩を通してプーランクの楽曲へ受け継がれていたとするならば、歌い手である筆者にとって、楽曲の捉え方が変わり、この楽曲の歌唱においても、以前とは異なる新鮮な見方を与えてくれるものである。

註

- 1 アポリネールと音楽の関係について全般的な概観を行う文献で、「1918年のカロール＝ベラルを最初として、10回ほど付曲された (mis en musique une dizaine de fois à partir de Carol-Bérard (1918))」(Maras 2021, 180) と述べられている。
- 2 最新の電子校訂版 Édition de Didier Alexandre et Michel Murat (2014) や、批判校訂版 Calligrammes dans tous ses états Edition Critique du Recueil de Guillaume Apollinaire (2008) を参照。
- 3 Claude Debon, *Calligrammes dans tous ses états édition critique du recueil de Guillaume Apollinaire*, 2008.
- 4 ニューヨーク近代美術館 MOMA の WEB サイト
URL: <https://www.moma.org/interactives/exhibitions/2012/inventingabstraction/?work=17>
- 5 Apollinaire, Guillaume. 2006. *Et moi aussi je suis peintre*, commenté par Daniel Grojnowski. Cognac : Le temps qu'il fait.
- 6 所蔵資料はオンラインカタログで確認できる。 <https://data.bnf.fr/fr/14833967/carol-berard/>
- 7 <https://data.BnF.fr/documents-by-rdt/14833967/tum/page1>
- 8 “En 1912, Carol-Bérard compose Hai-kai, une suite de 9 mélodies entrecoupées de quatre interludes.”
- 9 出版譜には1924年と1926年の2つの記載がみられる。本稿では BnF に記載の1926年で統一する。
- 10 RetroNews とは、BnFのデータベースサイトであり、17世紀半ばから20世紀半ばまでのフランスで発行された、2000以上のタイトルの定期刊行物の本文データを収める。
- 11 “Olivier Realtor, poète, et Carol-Bérard, compositeur, sont frères spirituels”
- 12 n. d. *Guillaume Apollinaire. Correspondance. I Lettres reçues*. vol. 2 Ber-B 1-9
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b100860794> フランス国立図書館の編纂により Gallica で公開されている。

引用・参考文献

- 伊藤晃 2001 「アポリネールと雑誌 SIC」『関西学院大学 年報・フランス研究』35号：33-46
- 長野順子 2022 「20世紀初頭の前衛劇運動における文化の編み合わせ ―ピエール・アルベール＝ピローと「日本人」」大阪芸術大学大学院『藝術文化研究』第26号：50-71頁。
- Apollinaire, Guillaume. 2006. *Et moi aussi je suis peintre*, commenté par Daniel Grojnowski. Cognac : Le temps qu'il fait.
- Chipot, Dominique. n.d. *Musique & haiku*.

<http://www.dominiquechipot.fr/haikus/fiches/musique%20et%20haiku.pdf>(2024年1月10日 最終閲覧)

Clémence, Jacquot. 2013. “Les « idéogrammes lyriques » d’Apollinaire : une remotivation graphique du signe ?” *Elseneur La Poésie, au défaut des langues* no. 27. 95-112.

Debon, Claude. 2008. *Calligrammes dans tous ses états, édition critique du recueil de Guillaume Apollinaire*. Aix-en-Provence: Calliopées

Dumesnil, René. 1930. *La musique contemporaine en France*. vol. 2 Paris: A. Colin.

Maras, Alessandro. 2021. *Apollinaire, les musiciens et la musique*. Paris: Classiques Garnier.

書簡

n.d. *Guillaume Apollinaire. Correspondance. I Lettres reçues*. vol. 2 Ber-B 1-9

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b100860794> (2024年1月12日 最終閲覧)

雑誌

Albert-Birot, Pierre. 1916. *SIC*. no. 12. Paris: Éditions SIC.

Saulgeot, George. 1917. *Lutetia*. Première Année no. 2. Paris: Edition de luxe.

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k6557956f> (2023年10月5日 最終閲覧)

閲覧サイト

Bibliothèque nationale de France - Catalogue général.

<https://catalogue.bnf.fr/index.do> (2023年10月5日 最終閲覧)

RetroNews - Le site de presse de Bibliothèque nationale de France

<https://www.retronews.fr/> (2024年1月14日 最終閲覧)

参考新聞・雑誌 (いずれも RetroNews にて参照)

La France、1918年8月12日づけ

Le Carnet de la semaine、1918年6月8日づけ

Le Figaro、1918年8月3日づけ

L'Europe nouvelle、1918年10月12日づけ

L'Intransigeant、1918年9月26日づけ

楽譜

Carol-Bérard. 1926. *Hai-kai*. Paris: Max Eschig